
さよならのメロディをあなたに

金本ちはや

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

さよならのメロディをあなたに

【コード】

N8838A

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

まだ春の訪れぬ、三月。卒業式の終わった黄昏時の教室で、わたしは彼を待っていた。学校に来るのは今日で最後。彼に会えるのも今日が最後。だから、今日しかないと思った。彼に、あの約束を果たしてもらおうのは。そして、この想いを告げるのは 女子学生と担任教師、あるひとつの恋の決着。

1 約束

だれもいない教室は、がらんとしていても広く感じられた。わたしは教壇に上がると、教卓の前に立って教室の中を見回した。整然と並んだ机と椅子。空っぽのロッカー。何も書かれていない、きれいな黒板。

それはどこかよそよそしい、他人行儀な光景だった。わたしの知っている雑然とした教室とは違う。毎日のように溢れていたざわめきが消えて、代わりに訪れた静けさはまるでなじみのないものだった。

今日、わたしはこの学校を卒業した。

あれだけ何度も練習した割には、卒業式はあっけなかった。涙が出る前に終わってしまった、という感じだ。

けれど、心はさびしきでいっぱいだった。

すでに陽は西に傾きはじめ、窓から射す光が教室の中をほんのりと赤く染めていた。今頃、元クラスメイトたちはカラオケボックスでも大いに騒いでいることだろう。

と、教室の前のドアががらりと開いた。続けて、驚いたような声が上がる。

「おっ」

ドアを開けたのは、予想どおりの人物だった。

「なんだ、もう来てたのか」

「先生が遅いんですよ。約十分の遅刻です」

わたしが黒板の上の壁掛時計を指差すと、彼は「あちゃあ」と額を叩いた。

「すまんすまん」

「……いいですけど、別に」

ため息混じりに答えると、彼の眉尻がしょんぼりと下がった。わたしは慌てて言った。

「何落ちこんでるんですかっ。わたしは全然気にしてませんって！」
「しかしなあ」

「しかしもかかしくもなくっていいんです！」
彼は些細なことですぐ落ちこむ。大抵の人間ならさっさと忘れてしまふような失敗を、いつまでも引きずっていたりする。

根暗な性格なわけではなく、ただ単に根が真面目すぎるのだ。それは明らかに短所だったけれど、わたしはそんなに嫌いではなかった。

「とにかく、わたしの前ではもうブルーにならないでください。そんなに落ちこみたいなら、家に帰ってからにしてください」

「……うん、わかった」

彼は真剣な顔で頷いた。いちいち思ったとおりの反応を返してくるのがなんだかおかしくて、わたしはこっそりと笑いを噛み殺した。

彼 春原先生は、わたしの担任だった。三十近いけれど、こうして生徒にからかわれるような、どこか間の抜けたところを持っている。比較的、生徒からは人気のある教師だった。

「それで。俺に用って、なんだ？」

「約束を果たしてもらおうと思って」

「約束？」

「いつか先生のピアノを聴かせてくれるっていう、約束」

わたしはじつと先生の顔を見つめた。先生は、フレームのない眼鏡の奥の目を瞬かせた。

「……ああ、そういえば、そんな約束してたな」

「そんなとはなんですか、そんなとは。約束は約束です。学校に来るのも今日で最後なんだから、ちゃんと守ってもらいますよ」

びしつと指を鼻先に突きつけると、先生は両手を上げた。

「わかったわかった。降参です」

「よろしい」

わたしは満足して頷いた。すると、先生がくすりと微笑んだ。

「氷野は大袈裟だなあ」

それはとてもやわらかい、くすぐったくなるような笑顔だった。わたしは一瞬目を奪われ、すぐに我に返った。

「……先生に言われたくありません」

「何い？ 俺のどこが大袈裟なんだ」

「自覚ないんですか？ すべてのリアクションが大袈裟ですよ」

肩を竦めてみせると、先生は腕を組んでむうっと唸った。本当に自覚していないらしい。

「それより、早く音楽室に行きましょうよ。先生のピアノ、聴かせてください」

わたしは先生のスーツの裾を引っ張った。先生は腕を解くと、がしがしと頭を掻いた。

「そう、だな。行くか」

「はい」

こうしてわたしと先生は教室をあとにして、音楽室へと向かった。

2 茜さす

音楽室は別棟にある。そのために、渡り廊下を通らなければならなかった。

ゆつくりと歩くわたしたちは、ちょうどその渡り廊下に差しかかっていた。建物と建物をつなぐために造られた、高さ二階の宙に浮かんでいる渡り廊下は、左右両面に窓があるせいかととも明るかった。更に赤みを増した、透きとおった光に満ちている。この時刻に射す陽の色は、どこか懐かしい。

「だけどよく憶えてたな、おまえ」

「え？」

光に見とれていたわたしは急に話しかけられ、驚いて先生を振り返った。先生は困ったように笑った。

「約束のことだよ」

「そりゃあ、憶えてますよ」

なんとなくむっとなって言い返した。先生は忘れていたのだろうか？

……きっと忘れていたに違いない。

「だって、先生のピアノが聴きたくて聴きたくてしょうがなかったんですもん」

「俺はあんまり聴かせたくないんだけどなあ。期待されるほど、巧うまくないし」

「またまたご謙遜を。三歳の頃から習ってたって聞きましたけど？」

「おまつ………いつたいどこでそんな情報を！」

「ひ・み・つ、です」

わたしはちつちと指を振った。それは、いろいろな筋から掻き集めたに決まっているではないか。

「でも、先生」

「ん？」

「やっぱり音楽の先生にはならないんですか？」

窺うように訊いてみると、先生はきゅっと眉間に皺を寄せた。

「うん……ならない、な」

先生は数学教師だ。そのおかげで、わたしは数学が得意科目になった。

「そうですか」

なんとなく残念だった。先生が音楽教師にならない理由は約束をしたときに聞いていたけれど、それでももったいないように思えてしようがなかった。

けれど、これはあくまで先生個人の問題だ。部外者のわたしが口を挟んでどうこう言う筋合いはない。

ピアノを聴かせてもらえるだけでも、よしとせねば。

そうこうしているうちに渡り廊下を渡りきった。あとは階段を昇るだけ。

「なあ、氷野」

階段の前で、不意に先生が訊いてきた。

「なんですか？」

「どうして、そんなに俺のピアノを聴きたがるんだ？」

わたしは、思わず絶句した。

先生は鈍い。とても鈍感な人だ。どうでもいいようなことはすぐ気がつくくせに、一番気づいてほしいことに気づいてくれない。

だからって、鈍すぎる。

「……………それは自分で考えてください」

そう答えるのが精いっぱいだった。

「ええ？」

先生は不満そうな声を上げた。けれどわたしはそれを無視すると、一気に階段を駆け上がった。

「おおい、ちよつと待ってくれ！」

慌てたように先生が追いかけてくる。わたしはそれをちらりと見て、本日二度目のため息をついた。

3 理由(前書き)

主人公のモノローグです。

さよならのメロディをあなたに

さよならのメロディをあなたに

た。けれど、最後の最後で“いい子”の仮面を脱ぎ捨てた。

これは悪あがきだ。

けれど、どうか見逃してほしい。

先生、ごめんなさい。

わたしは“いい子”なんかじゃありません。わたしはとっても
“悪い子”です。

……ごめんなさい。

4 あなたへ

音楽室のドアは前後とも閉まっていた。これは想定内のことだったので、ぬかりはない。私は事前に職員室から拝借した鍵をポケットから取り出すと、前のドアの鍵穴に差しこんだ。

「準備がいいなあ」

「当然です」

いちいち取りに戻るの面倒くさい。わたしはドアを開けて中に入ると、照明のスイッチを押した。

パチツという小さな音を立てて、蛍光灯が点く。窓の外の景色はすっかり夕闇に沈んでいた。

「おう、寒い」

先生は両の掌をこすり合わせた。確かに、音楽室の中は冷えきっていた。

「こっちの校舎は陽が当たりませんからね」

「まあなあ」

三月になったとはいえ、朝夕は気温が低い。わたしは暖房をつけた。

「ああ、ありがとう」

「いえ」

先生は両手をこすり合わせながら、窓際にあるグランドピアノに歩み寄った。

わたしはごくりと喉を鳴らした。

先生がいったいどんな目でピアノを見ているのか、なんだか怖かった。

背もたれのない椅子を引き寄せて、先生は腰をかけた。蓋を開ける。白と黒の鍵盤が現れた。

先生はじつと鍵盤を見つめた。いつになく緊張した表情。唇を固く引き結んでいる。

右手を、そつと鍵盤に載せる。人差指で、白鍵のひとつを押す。ポーン……と高い音が響き渡った。先生はふうつと息を吐き出した。張り詰めていた緊張が、わずかにゆるんだ。

「懐かしいな」

浮かんだのは、笑顔だった。

と、不意に先生がわたしを振り返った。

「なあ、氷野」

「な、なんですか？」

思わず声が裏返ってしまった。

「今、妙案を思いついた」

「妙案？」

「おまえ、合唱部だったよな」

「え？ ええ、まあ」

「よし。じゃあ氷野、おまえ歌え」

「……………はい？」

わたしは耳を疑った。

先生は珍しく、意地悪げな笑みを浮かべた。

「俺が伴奏を弾くから、おまえは歌え」

わたしは仰天した。

いきなり何を言い出すかと思えば。

「できませんよ！」

「なんで？ 合唱部だったんだからできるだろ」

「お聴かせできるほど巧くありません！」

「そんなの、俺だって一緒だ」

「レベルが違います」

「おんなじだって。それに」

先生は一度言葉を切り、にやりと笑みを深めた。

「俺はおまえの歌が聴きたいな」

……………なんて卑怯な。

ずるい。

「……先生」

「おまえが歌わないなら、俺も弾かんぞ
ますますずるい。」

わたしは口をぱくつかせ、そして三度目のため息を洩らした。
わたしの、負け。
しょうがない。

「わかりましたあ」

「よし」

ああ、もう。

笑わないでください。

「じゃあ、曲をリクエストしてもいいですか？」

「いいぞ。ただし、あんまり難しいのはパスだ」

「わかってます。……ええっと」

どんな曲がいいだろうか。たった一度きりなのだから、後悔しな
いものを選びたい。

そうだ。

「決まったか？」

「はい」

「なんだ？」

「……… 仰げば尊し」

曲名を口にすると、先生は目を丸くした。けれどすぐに頷くと、
鍵盤に視線を落とした。

わたしは先生に向き直った。カーテンの引かれていない窓ガラス
は、夜の色に塗り潰されていた。蛍光灯の明かりを受けて、窓ガラ
スの中にわたしたちの姿が映りこんでいる。鏡のように、はっきり
と。

最初の一音が弾け、曲がはじまった。先生の指が、滑らかに旋律
を紡いでいく。

わたしを大きく息を吸いこみ、歌い出した。

なぜこの曲を選んだのか。それは今、このときに最もふさわしい
と思ったからだ。

これは、先生に捧げる歌。わたしは先生のためだけに歌う。報わ
れなくてもいい。想いが届くように祈りをこめて。

窓ガラスに映る先生の左の薬指が目についた。小さく光る、銀色
の指輪。

いつも、いつもあの指輪が恨めしかった。あの指輪を通して、先
生の奥さんの存在を常に感じていた。

ねえ、先生。

これもわがままだってわかっています。

でも、どうか今だけは。この曲が続いている間だけは。

あなたと奥さんをつなぐ指輪のことを、忘れてください。

絶対に叶うわけがない。そう思いつつも、願わずにはられない。
やがて、曲は終盤を迎える。

わたしは目を閉じた。体中から伝えたい気持ちを掻き集めて、歌
声に乗せる。

先生。

とても丁寧に数学を教えてくれてありがとうございました。
いろいろと失礼なことを言っちゃってごめんなさい。

先生に会えて、本当によかった。

それから。

それから

先生が最後の鍵盤を叩く。

高く高く音はこだまし、尾を引くような長い余韻を残して 消
えた。

わたしは目を開いた。

先生は椅子に座ったまま、息を吐いていた。その顔は達成感に溢れて、とても満足そうだった。

よかった。

「……先生」

「ああ、氷野」

「ありがとうございます、ごさいました。先生のピアノ、とっても上手でしたよ」

「氷野の歌声も、とてもきれいだった」

わたしは微笑んだ。

たぶん、わたしは敗者だ。

それでも、今のわたしは幸せだった。

泣きたくなるくらい、幸せだった。

「先生」

唇になじんだ呼び名が、無意識のうちにこぼれていた。

「ん？」

先生は、いつものように首を傾げた。

わたしは。

わたしは、先生に一番伝えたい言葉を、言った。

「好きです」

先生は。

「ありがとうございます」

先生は、優しく微笑んだ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8838a/>

さよならのメロディをあなたに

2008年11月7日09時17分発行